

会員の広場



「物申す会、百回」に思う

上田 次兵衛（東京）

平成21年6月に始まった「物申す会」は、今年6月の例会で丁度百回を数えた。百回位で喜んでいると、佐藤愛子さんに「何がめでたい！」と一喝されそうだが、初期の頃から参加している一人としては、よく続いたものだ」と素直に喜びたい。5月の例会で、「昭和

館」と「しょうけい館（戦傷病者史料館）」を訪ねた折に、「政治家さんの集まりですか」聞かれて返答に困ったことがある。

何故「物申す会」なのか。今となってははっきりしない。ただ、かつての当倶楽部の講演会は質疑応答なしだったが、前理事長の代から質問を受け付けるようになった。それでも、講演という性格上、講師の所説を拝聴するのが基本である。「大鏡」の序に「おぼしきこと言わぬは（げにぞ）腹ふくるる心地しける」という一節があるが、月に一度位は会員同士で大いに論じ合う場があっても良いのではということが始まった会のようなのである。加えて、議論だけでなく場合によっては、世の中に提言することがあっても良いということ

で、「物申す会」というやや武張った名前になったのだと聞いたような記憶もある。

発足以来、政治経済に限らず、歴史文化等幅広いテーマを選んで論じてきたが、その陰には、昨年末まで座長を務められた深瀬 拓氏のご苦勞（例えば、明治神宮や東大の三四郎池を訪ねての「緑陰論争」や、会員の現役時代の活躍ぶりを聴く「キャリアを語る」の企画など）があったことを記しておきたい。記念すべき第百回のテーマは「朝鮮半島情勢を考える」とした。例会の三日前に「歴史的な」米朝首脳会談の開催が予定されていたので、今最もホットな話題に挑戦したことになる。しかし、テーマがあまりに大き過ぎて限られた時間では十分な議論は出来なかった。

今回の首脳会談に関しては、専門家の間でも評価が分かれている。「米朝会談はウイン・ウインだった」（佐藤優氏）という声のある一方で、「成果は何もなかった。大山鳴動してネズミ一匹だった」（岡本隆司・京都府立大学教授）と酷評する向きもある。

安倍首相は会談前の圧力一辺倒から対話路線に切り替えようとしているかに見えるが、果たして拉致問題は解決に向かうのか。日本の安全保障にとっては非核化とミサイルの問題の方が優先度が高いのは明白な筈だが、今の安倍政権でこれらの問題を解決できるのか。解説屋ばかりで哲学を持った評論家のいないことが、今の日本の最大の危機だと思ふ。劣化しているのは政治家ばかりではない。